

天界理解と天界表現の諸相

— 古代インドを中心に —

打本 和音

はじめに

仏教では、肉体の束縛を離れ、輪廻の鎖を断ち、完全なる涅槃 *parinirvāṇa* の境地に入ることを最終目的とする。言い換えれば、それは、我 *ātman* の否定にあたる。にもかかわらず、死後に天へ生じるというルートもまた、仏教の中では伝統的に示されてきた。天へ生じるとは、肉体を離れたのちも我があると、いう前提に立つてこそ成り立つ思想であり、本来的な仏教のスタンスとは矛盾する関係にある。矛盾をはらみつつも涅槃と生天とが伝統的に説かれてきたことは長らく指摘されるところであり、かかる状況は、生天が古代インド社会において看過しがたい影響力を持っていたことを示している。

天の観念は、仏教以前よりインド世界に根付いていた諸信仰のなかで伝統的に重視されてきたことが知られている。仏教における天／天界理解は、そうした他宗教に由来する概念を取り入れつつ成長してきたと考えられてきた。

ただし、仏教での天界は、迷いの世界として位置づけられており、仏教興起以前のインドの伝統に反して、決して高い地位にあるとはいえない。ところが、そうした仏教側の公式見解とは相矛盾する、天を重視する意識も仏教内部に見られる。なかでも兜率天は、欲の世界を離れ切れない天人たちの住処である欲界内に位置しながら、次代のブッダが地上へと降り立つ前に待機する場所としての役割を付帯されてきた。地上に降り立つ前の釈尊や、釈尊滅後の次代のブッダである弥勒菩薩の待機場所として知られており、必ずしも低い扱いを受けているように見えない。こうした、いわばダブルスタンダードともいえる天の扱いについては、これまでさまざまな言及はありつつも統合的考察はほとんど行われてこなかった。

そこで、本研究ノートでは、仏教における天界が人々にいかに理解され、受容されてきたのかを明らかにするための準備段階として、古代インドを主たる対象に、天にかかわる研究をとりまく状況の整理を行いたい。

一、仏教における天

仏教における「天」は、仏教に帰依する人々や、仏教にかかわる環境を守護する役目を帯びた尊格 *deva* を指す場合と、そうした尊格の居住空間 *devataloka* ⁽¹⁾ をあらわす場合とがあると一般に解説されてきた⁽²⁾。かかる天／天界については、仏教以前よりインドに根付いていた諸信仰のなかで伝統的に重視されており、仏教の諸天／天界についても、既によく知られていた他教の天にルーツを持つものが多いと考えられている。なかでもその筆頭となるのが、ヴェーダの神々として知られる帝釈天 *Indra* と梵天 *Brahma* であろう。両者は、仏教説話中にもしばしば登場し、重要な役割を担う。

なかでも「梵天勧請」の説話はその好例といえるだろう。魔を下し、菩提樹下で悟りの境地に至った釈尊は、しかし自身の悟りの内容を他者に語ることをためらう。そんな釈尊のもとに、梵天が参じて広く法を説くよう要請したというエピソードであり、数ある仏伝のシーンの中でも特に重要な場面のひとつとして知られる。この場面は仏伝図としても好まれ、悟りを決意した釈尊の後ろで合掌する梵天、また、しばしば対になるようにあらわされる帝釈天の姿が数多く造形化された【図1】⁽³⁾。



図1 梵天勧請

梵天と帝釈天とがセットで表現されるものとしては、「三十三天降下」の説話もまた、本件に関して示唆的である。本説話は、釈尊が、自身を出産して間もなく亡くなり、天界に生じていた生母・摩耶⁽⁴⁾のもとを訪れて説法を行っていたところ、地上の人々からの要請があり、人間界へ帰還するというストーリーである。釈尊の生涯のうちの重大な出来事として「八大事」のひとつにこだわられ、釈尊がこのとき降り立った地とされるサンカーシヤ Sankāsya は「八大聖地」のひとつとして知られるなど、仏伝のなかでも一定の比重が置かれたエピソードであったことがわかる。

かかる説話をあらかず仏伝図では、釈尊の地上への帰還に際して創られた天界と地上とをつなぐ階段を、左右に梵天と帝釈天を従えて降下する釈尊の姿が印象的に表現される【図2】⁽⁴⁾。「三十三天降下」図もまた、数多くの遺例が現存しており、そこでは神々と釈迦との関係性が視覚的に示される。

梵天や帝釈天が、ヴェーダでも中心的な位置を占める尊格であることは周知のとおりである。よって、彼らの仏教説話中における登場は、インドの伝統宗教に対する仏教の優位性を表現しようとしたものとして一般に理解されてきた傾向にある。このことは、既にインド社会でよく知られたなじみ深い神々を取り込むとともに、仏教という枠組みの中で低位の存在として印象付けてきた、ということも出来る。

空間としての天についても、同様の傾向が指摘される。帝釈天の住する三十三天／切利天 [Rāyastīmsa-deva-loka] や、梵天の治める梵界 Brahma-loka は、仏教以前から広く認知され、憧憬の対象とされてきたと考えられている。ただし、それらメジャーな天界もまた、仏教においてはまだまだ迷いから抜け出せていないものたちの世界とされており、決して高い地位にあるとはいえない。特に三十三天や兜率天などの欲界に含まれる天界は、その傾向が顕著である。

なお、天の世界を五道や六道のひとつと位置づけ、迷いの世界であることを強調する向きは、教義として語られるだけでなく造形化も行われ、視覚に訴えかける工夫も行われていたようである。インド内部では唯一、アジャンター石窟第十七窟に「五趣生死輪」図の遺例が存し、ヴェランダ左側壁上部に大きく迷いの世界の有り様が描かれる【図3】⁽⁵⁾。生死輪のうち下部は剥落しているものの、上部には三十三天の様子と比定される描写がみられる⁽⁶⁾。天の世界が、輪廻したのちの行き先としては上位に位置付けられていること、それでもなお輪



図2 三十三天降下

廻の輪の中にあることが視覚的にも示される。

以上のように、天／天界を取り巻く状況からは、従来のインドの伝統を取り入れつつも、それらが仏教的枠組みの中で低位に再配置されることがわかる。一方で、後述のように、仏教が比較的初期の段階から生天論に言及している形跡があること、仏教が成長を遂げる中でやがて天の構造が整理され、様々な機能を持つようになる状況と鑑みると、涅槃を最上とするはずの「正統的な」仏教教団のなかにあっても無視できない程度に生天への関心が高かったこと、あるいは、生天が社会のなかで当たり前のものとして受け入れられていた状況が想像される。



図3 五趣生死輪

二、目的地としての天

生天についての具体的検証に際しては、主に次第説法を扱う研究の中で取り上げられてきた傾向にある⁽⁷⁾。死後に天上に生まれ変わることを読む生天論は、次第説法のなかの三論のうちのひとつとして説明される場合が多く、生天論を含めた次第説法のパターンについても検証が進められてきた⁽⁸⁾。

次第説法 *anupubbī-katha*、*anupubbī-katha* とは、施論 *dana-katha*、戒論 *śīla-katha*、生天論 *sarga-katha* の三論に始まる説法を指し、とりわけ、在家信者、あるいは未信者に説く教えとして位置づけられてきた。ただし、これらは単に三論のみを説くものではなく、布施の功德を説き、そののちに持戒の功德を説

き、それらの功德によって生天がなされることを説いたうえで四諦を説く、というプロセスを経て、解脱をすすめるところがセットであることがテキスト自身によって語られる⁽⁹⁾。かかる状況を踏まえて真野は、仏教の生天は、古期ウパニシャッドの生天思想を全面的に引き継いで仏教教義の中に包摂していったものであるとしたうえで、ただし「仏教の生天は、生天で完全ではなく、生天が解脱を実現し、解脱を約束されなければならない」といわば、解脱と完全に分離したものでなく、表裏関係にならないと指摘している⁽¹⁰⁾。生天は、快樂主義的な天界へと生じることが目的であると捉えられる向きも未だ根強いが、次第説法全体のプログラムとしては、あくまでも解脱を最終目的にすえたその前段階として位置づけられているということを、改めて意識しておく必要がある。

また、出家者にとって「生天を望むことは五つの束縛の一つである」とするテキストもある一方で⁽¹¹⁾、天に生じる出家者の姿を特段の批判なしに述べる事例も指摘されることである⁽¹²⁾。こうした相矛盾する資料からは、生天が出家にも在家にも関心を持たれたこと、もしくは生天が当然のこととして受け入れられていた社会背景が見いだせる。かかる込み入った状況については、今後の整理を踏まえて一定の傾向を見出すべくさらなる検討が必要となるが、少なくとも生天が仏教にとって無視しがたい位置にあったことは間違いない。では、出家在家の別を問わず興味を持たれた天界とは、いかなる場として認識されていたのだろうか。

三、天界への関心

天界がどういった場所なのか、という問題については、主に仏教の宇宙論をめぐる研究成果によって説明されてきた傾向にある⁽¹³⁾。仏教典籍の中でも、仏教における宇宙観に言及するものとしては、特に左記の經典群が取り上げられてきた⁽¹⁴⁾。

『長阿含経』「世記経」⁽¹⁵⁾

『大樓炭経』⁽¹⁶⁾

『起世経』⁽¹⁷⁾

『起世因本経』⁽¹⁸⁾

本研究の関心事である兜率天を含む六欲天についても、これら經典内で解説される。なお、『大樓炭経』、『起世経』、『起世因本経』は『長阿含経』、『世記経』の同本異訳であると伝えられ、基本的な内容は近しい⁽¹⁹⁾。

六欲天とは、人間/人間界よりは高位に位置するものの、いまだ欲望にとらわれた尊格/世界を指し、人間の住む地上に近いものから順に、四天王天、三十三天、夜摩天、兜率天、樂变化天、他化自在天を指す。先に示した經典群のなかでは、六欲天を含む各天の位置や規模、身長や寿命の違いなどが列挙されており、天界が重層的に存在する様が示される。

ただし、天界の構造などについては三十三天を中心に説明がなされ、他の天の説明は省略傾向にある。各天の天主についても、三十三天の天主を帝釈としつつも、他の天については天界の名称と天主の名称をおおむね同じくしており、尊格としての天とその住居としての天界が示されるというよりは、天界の説明が優先され、天主については明確な説明意識が乏しいことにも注意が必要である⁽²⁰⁾。また、これら四経では、六欲天が欲界であることは示されつつも、歡樂的な様子が強調されているとはいえない。天が歡樂的な場であることから生天が願われたとする意見も根強いが、少なくともその根拠として、これら四経をあげることはふさわしくないように思われる。

むしろ歡樂的な天界の様子は『正法念处経』⁽²¹⁾「観天品」のなかで比較的まとまった形で示される。「観天品」でとりあげられるのは、六欲天中、四天王天、三十三天、夜摩天のみではあるが、そこには天女たちと酒を酌み交わし、愛欲に倦むことのない天界の絢爛たる様子が詳細に説かれている。こうした表現は、ガンダーラの饗宴図をはじめ、仏塔や仏教寺院の装飾にみられる非仏教的のモティーフとの関連も指摘されており、考古美術資料と共に、当時の天界理解の一側面を検証するうえで示唆に富む⁽²²⁾。

その他、重層的な天の構造がより整然と整理されたものとして広く影響力を持った『阿毘達磨俱舍論』や、独自の発展を見せる『立世阿毘曇論』⁽²³⁾なども、仏教が天界をどのように捉えようとしていたかを理解するうえで重要である。両者はそれぞれ東アジアや東南アジアの仏教にも直接間接に影響を与えており、仏教思想の伝播と変遷の過程を考えるうえでも有用である。これらのテキストについては既に重厚な研究蓄積があるが、古代インド世界における天/天界受容の観点から改めて検討していく必要がある。

四、生天の候補地

見てきたように、仏教では様々な天界が設定されており、天をめぐる教義的發展や関心の度合いとともに整理もなされてきた。では、こうした天界のうち、いかなる天界への生天を人々は目指したのだろうか。

人々が願ったであろう生天先についての専論は、現状では管見の限り見当たらない。しかし、従来明言されないまでも、三十三天、梵天、兜率天が、生天の候補地として想定されてきた傾向にあり⁽²⁴⁾、こうした先行研究の見解には、様々な經典に説かれる事例が論拠として挙げられ、それぞれに一定の説得力をもつ。一方で、論拠とされてきた經典の内容が、いかなる地域のいかなる時期に成立したもののなのか、また、どの程度の実地的な影響力があったものなのかを文献資料のみで明らかにすることに困難も伴う。そこで、生天先に関する人々の意識について、時代的・地理的状況を整理する目的のもと、インド各地に残される、ある程度の原位置がわかる寄進名等の石刻資料を対象に、その内容について、整理・検証を行った⁽²⁵⁾。

ところで、本件に関連して中国では、少なくとも南北朝期までには、希望する往生先を明記した石刻資料が一定数確認されている⁽²⁶⁾。そこで、中国において隋が国家統一を図る六世紀をひとつの区切りとしてインド側の資料を確認してみたが、現状でインド側の石刻資料中には、具体的な生天先の希望を明示した例が見当たらない。本検証は今後引き続き継続予定であるが、いずれにしても、生天先の希望を表明することは石刻資料中では必ずしも一般的でない可能性が想定される。こうした状況は、中国側とは異なる様相を示しており、慎重に検討をすすめる必要がある。

こうした状況が生まれた背景についてはさらなる検証が必要になるが、インド側の在銘資料の傾向として、寄進者や、寄進者と縁故のある人物の名が記される例や、寄進による果報が廻向されるようにと願う文言が大半を占めている。天界往生に布施が不可欠であることは、先に確認した次第説法をめぐる状況を見る限り、ある程度一般にも認知されていたと考えてよい。したがって、現段階では、生天も含めた何らかの果報を意識した寄進行為は行われていたもの、生天先を含む果報の具体的内容については、明記する習慣や必要性がなかった、あるいは、明記すべきではないとの認識があったことが想定される。

周知のとおり、ニカーヤや仏伝文献、ジャータカといった資料中には、生天

の行き先、あるいは生天後に所属している天界の名称が明記されている例が散見される。こうした、石刻資料中にみられる特定の天へ生じることを必ずしも希望していない態度との差については、今後にさらなる検証が必要となる。

まとめにかえて

以上、天をめぐる研究の状況を、四つのトピックから整理してきた。天や生天に関しては、仏教学のみならず考古学や美術史学、歴史学など各分野から研究がすすめられ、それぞれに有益な研究蓄積がある。ただし、経論やジャーナカ、考古美術資料、碑文資料などに天や生天に対するスタンスが異なることなどから、必ずしも統合的な研究が進んでいるとはいえない。今回の各トピックにおける課題の整理を踏まえたいうえで、今後は従来の天をめぐる研究蓄積に導かれつつ、さらなる検討を加えるとともに、断片的に残る資料のクロスチェックをすすめ、天受容の様相の解明を目指したい。

註

- (1) そのほかにも deva-nagara, sarga, sarga-patha, sarga-pada など、天界を示すタームは広く散見される。
- (2) たとえば『仏教文化事典』では「天部の諸尊は、もともとインド神話や民間信仰において、さまざまな形で信仰されていた神々が仏教に取り入れられて、仏教を守護する役割を与えられたものである。如来、菩薩、明王が人々を彼岸(悟り)に導くことを使命としているのに対して、天部の諸尊は、仏教の教えや教えを信じ行おうとする人々を種々の障害から守護することを目的としている(中略)一般に神的存在およびその住居としての天を意味している」とある。こうした解説の傾向はその他の仏教系辞典でも同様に看取され、概説として正鶴を射ているといえるが、一方でこうした解説の枠におさまらない天界表現についても改めて目を向けていく必要がある。金岡秀友・柳川啓一監修、菅沼晃・田丸徳善編集『仏教文化事典』、佼成出版社、一九八九年、六五頁。
- (3) 図1「梵天勸請」ロリヤーン・タンガイ出土、緑色片岩、三三・五×三一×六・五センチメートル、ラホール博物館所蔵 (Inv. No. G89)、栗田功『ガ
(4) 『根本説一切有部毘奈耶雜事』には、精舎の裝飾として「五趣生死輪」を描くように示される。アジャンター石窟第十七窟の「五趣生死輪」図に関しては、特に以下を参照した。平岡三保子「インドの生死輪図—アジャンター壁画の作例について—」、立川武蔵編『曼荼羅と輪廻—その思想と美術—』、佼成出版社、一九九三年、二七〇—二九六頁、定金計次「Ajanta 第17窟の「五趣生死輪」壁画—各区画の主題比定と諸問題—」、『西南アジア研究』四二、一九九五年、二〇—四三頁、福山泰子「第一七窟における「帝釈窟説法」図の意味—「五趣生死輪」図との関連から—」、『アジャンター後期壁画の研究』、中央公論美術出版、二〇一四年、一八九—二〇四頁。初期仏教における生天の問題を論じたものとしては、とくに以下を参照した。辻本鐵夫『原始仏教に於ける生天思想の研究』、眞眞學苑出版部、一九三六年、藤田宏達「原始仏教における生天思想」、『印度學佛教學研究』一九二、一九七一年、九〇—一九〇九頁、舟橋一哉『原始仏教思想の研究—縁起の構造とその実践』、法蔵館、一九七三年、真野龍海「初期仏教
ンダーラ美術Ⅰ 改訂増補版 仏伝』、図版番号二五一、二五二、二〇〇三年。なお、梵天勸請図については、特に以下を参照した。長谷山説子「帝釈窟説法」の説話と図像—ガンダーラにおける「16人のバラモンの訪仏」『梵天勸請』との混淆を中心に」、『龍谷大学大学院文学研究科紀要』三二、二〇一〇年、一二二—一三九頁、宮治昭『インド仏教美術史論』、中央公論美術出版、二〇一〇年 etc.
- (4) 図2「三道宝階降下」ガンダーラ地方出土、灰色片岩、二—三世紀、四九・五×五七センチメートル、ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館所蔵 (Inv. No. T.5.1195)、田辺勝美・前田耕作編集『世界美術大全集 東洋篇』十五、図版番号一四〇、小学館、一九九九年。なお、三十三天降下図については、特に以下を参照した。肥塚隆「「三十三天降下」図の図像」、『待兼山論叢 美学篇』十一、一九七八年、二九—四八頁、小泉恵英「古代インドの三十三天降下図—パキスタン・ザールデリー遺跡出土品を中心に—」、『Museum』五九八、二〇〇五年、七一—三五頁。
- (5) 図3「五趣生死輪図」アジャンター第十七窟ヴェランダ左壁上部、ヴァーカータカ時代(五世紀後半)、約一九五×二六五センチメートル、現地、撮影筆者。
- (6) 『根本説一切有部毘奈耶雜事』には、精舎の裝飾として「五趣生死輪」を描くように示される。アジャンター石窟第十七窟の「五趣生死輪」図に関しては、特に以下を参照した。平岡三保子「インドの生死輪図—アジャンター壁画の作例について—」、立川武蔵編『曼荼羅と輪廻—その思想と美術—』、佼成出版社、一九九三年、二七〇—二九六頁、定金計次「Ajanta 第17窟の「五趣生死輪」壁画—各区画の主題比定と諸問題—」、『西南アジア研究』四二、一九九五年、二〇—四三頁、福山泰子「第一七窟における「帝釈窟説法」図の意味—「五趣生死輪」図との関連から—」、『アジャンター後期壁画の研究』、中央公論美術出版、二〇一四年、一八九—二〇四頁。初期仏教における生天の問題を論じたものとしては、とくに以下を参照した。辻本鐵夫『原始仏教に於ける生天思想の研究』、眞眞學苑出版部、一九三六年、藤田宏達「原始仏教における生天思想」、『印度學佛教學研究』一九二、一九七一年、九〇—一九〇九頁、舟橋一哉『原始仏教思想の研究—縁起の構造とその実践』、法蔵館、一九七三年、真野龍海「初期仏教

- (8) に於ける生天と解脱」、『日本仏教学会年報』四四、一九七八年、四九一―六四頁 etc.
- (9) 次第説法の定型句の特徴の検証を試みた鮫島によると、釈尊による次第説法を説くとの宣言に始まり、帰依もしくは出家を申し出るところまでを次第説法の定型句と考えたとき、南伝の五ニカーヤとヴィナヤでは *Samyutta Nikāya* を除くテキストにおいて二四例、北伝四阿含では二三例が確認され、律でも『五分律』、『摩訶僧祇律』、『四分律』、『十誦律』、『根本説一切有部毘奈耶』のすべてに定型表現がみられるという。また *sagga-katha* というタームに着眼しつつ、次第説法に準じるとみなしうる表現を検証した石上は、ニカーヤとアッタカターでそれぞれ *sagga-katha* が示す意味が異なることを指摘している。石上和敬「施論、戒論、生天論」、『印度學佛教學研究』四一―二、一九九三年、一〇一―一〇四頁、鮫島有理「次第説法とはどのような説法か―施論、戒論、生天論は誰に説かれるのか?」、『印度學佛教學研究』六六一―二、二〇一七年、四一五―四二二頁。
- (10) *anupubbīkathan ti dānānantaraṃ sīlāṃ sīlānantaraṃ saḅbaṃ saḅbaṃ tarāṃ maggaṃ ti evaṃ anupatīpātikathan. bhagavā hi paṭhamāṃ hevaṃ unā saddhīṃ assādaṃ dassetvā. tato satte viveceṭṭuṃ nānaṃ nāyehi ādhanāṃ pakāsetvā. ādhanavaṃnena samviggaḥadāyānaṃ nekkhammaguṇaṃ avbhāvaṇaṃ mukhena ca vivattaṃ dasseti. (Udanapiṭakha. p. 281)*
- 「次第の説とは、布施に続いて戒を、戒に続いて天を、天に続いて道をという、かくのごとき次第の説である。なぜなら世尊ははじめに因と共に楽味を示して、その後、有情たちを遠離させるために種々の方法で危難を明らかにし、危難を聞くことで心が動いた者たちに出離の徳を明確に示すことを通じて解脱を示す」(訳文参照、鮫島二〇一七)
- (11) 真野龍海「初期仏教に於ける生天と解脱」、『日本仏教学会年報』四四、一九七八年、五〇頁。
- (12) *Dīgha Nikāya. III, p.239. Majjhima Nikāya. I, p. 102 etc.*
- (13) たゞは *Samyutta Nikāya* では「七人の比丘が解脱して無煩天に生まれた」*avhaṇāṃ upapannāse vimuttā satta bhikkhavo (Samyutta Nikāya p. 35)* と、比丘が解脱後に天に生まれることが特に注意を払われずに言及される。なかでも、定方による一連の著作の影響力は大きい。定方晟「須弥山と極楽―仏教の宇宙観―」(講談社現代新書三三〇)、講談社、一九七三年、『仏教にみる世界観』(レグルス文庫二二二)、第三文明社、一九八〇年、『インド宇宙誌―宇宙の形状・宇宙の発生』春秋社、一九八五年、『インド宇宙論大全』春秋社、二〇一一年 etc.
- (14) これらのほかにも仏教の宇宙観に関する、よりプリミティブな内容を含む記述や断片的言及が阿含経類や注釈書類などに散見される。
- (15) 佛陀耶舎・竺佛念訳『長阿含経』「世記経」(大正蔵一、N.〇.一)『長阿含経』については、その原語はガンタリーであること、法蔵部との関わりが深いことが、前田や辛嶋を中心に指摘されている。前田恵學『原始仏教聖典の成立史研究』、山喜房仏書林、一九六四年、辛嶋静志『長阿含経』の言語の研究―音写語分析を中心として―、平川出版社、一九九四年。
- (16) 法立・法炬訳『大樓炭経』(大正蔵一、N.〇.一三三)
- (17) 闍那崛多等訳『起世因本経』(大正蔵一、N.〇.二四)
- (18) 達磨笈多訳『起世因本経』(大正蔵一、N.〇.二五)
- (19) ただし、完全な合致をみせてはおらず、これらの経典群の成立についてはなお検討の余地がある。丘山新ほか『現代語訳「阿含経」―長阿含経―』六、平河出版社、二〇〇五年。
- (20) この件に関連して、『天智度論』では、六欲天中の夜摩天、兜率天、樂變化天、他化自在天の天主を魔王としている点も示唆的である。各天主については校を改めたい。「魔王常來燒佛、又是一切欲界中主。夜摩天、兜率陀天、化樂天、皆屬魔王」中略、問曰、先已説天世界、今何以復説天。答曰、天世界是四天王初利天、魔是他化自在天」(大正蔵二五、N.〇.一五〇九、一三四c、一三三a)
- (21) 般若流支訳『正法念処経』(大正蔵十七、N.〇.七二二) (*Kṛvā sādharṇa sm'v'up-cāhāna sūtra*) 東魏の元象元年から武定元年の間(五三八―五四三)の訳とされ、チベット訳はあるものの梵本の存在は確認されない。ただし、『正法念処経』によって集成されたことを語る『諸法集要経』(*Saḍḍharmasamuccaya*) (大正蔵十七、N.〇.七二八)をはじめ多数の経典で引用が確認されることから、インドにルーツを持つ経典である可能性が高いとされる。水野はその梵本が紀元後二世紀ごろに成立したものと想定しており、古代インド世界における造形作品の考察に際しても重要である。山邊習學「正法念処経解題」、『国

- (22) 訳一切経 経集部』八、大東出版社、一九三三年、水野弘元「正法念処經について」、『印度學佛教學研究』十二一、一九六四年、三八―四七頁。本件に関わる論考のうち、主として参照したのは以下。田辺勝美「ガンダーラのいわゆる饗宴図浮彫について―新資料の紹介を中心に―」、『仏教芸術』一三七、一九八一年、三五―五六頁、同「仏像の起源に学ぶ性と死」、柳原出版、二〇〇六年、杉本卓洲「インド仏塔の研究―仏塔崇拜の生成と基盤―」、平楽寺書店、一九九三年、小谷伸男「ガンダーラ坐仏台座の酒宴浮彫」、『西南アジア研究』六一、二〇〇四年、一一―一九頁、入澤崇「ガンダーラ仏教徒は何を願ったか―碑文にみられる「利益・安楽」を考へる―」、『ガンダーラ美術の資料集とその統合的研究 研究成果報告書』一、二〇一三年、一九五―二〇四頁、田辺理「ガンダーラの仏教彫刻と生天思想」、中央公論美術出版、二〇一二年 etc.
- (23) 眞諦訳『佛説立世阿毘曇論』(大正蔵三三・N.〇・一六四四) (*Lokaprajñapti-abhidharma-sāstra*) 梵本は伝わらない。ただし、ビルマやタイで知られる *Lokaprajñapti* が、様々な編集は加えられてはいるものの、そのパーリ語版にあたることが示唆されている。なお、岡野は立世阿毘曇論ならびに *Lokaprajñapti* の所属部派は正量部である可能性を指摘している。Paul Mus *La lumière sur les six voies : tableau de la transmigration bouddhique d'après des sources sanskrites, pâli, tibétaines et chinoises en majeure partie inédites*. Paris : Institut d'ethnologie. 1939; Eugène Denis *La Lokaprajñapti et les idées cosmologiques du bouddhisme ancien*. Paris : Atelier Reproduction des thèses, Université de Lille III, 2 vols. 1977; 岡野潔「インド正量部のコスモロジー文献」、立世阿毘曇論』、『中央学術研究所紀要』二七、一九九八年、五五―九一頁。
- (24) 一般的な生天先として三十三天を想定していると思しき論考は、数多く見受けられる。一方、たとえば雲井のように「仏教興起以前の天界を代表する梵天界だろうか。ごく常識的には(中略)兜率天を意味している、とみるのが順序であろう」と、兜率天を想定する見解もある。雲井昭善「兜率天考」、塚本啓祥教授還暦記念論文集刊行会編『塚本啓祥教授還暦記念論文集 知の邂逅―佛教と科学』、佼成出版、一九九三年、一三二頁。
- (25) 主たる確認対象は以下であり、今後これら資料で取り上げられていない資料についてもさらなる確認を要する。静谷正雄『インド仏教碑銘目録』、平楽寺書店、一九七九年、塚本啓祥『インド仏教碑銘の研究』I―III、平楽寺書店、一九九六―二〇〇三年。
- (26) 本件に関しては、主に以下を参照した。佐藤智水『北魏仏教史論考』(岡山大学文学部研究叢書二五)、岡山大学文学部、一九九八年、倉本尚徳『北朝仏教造像銘研究』、法蔵館、二〇一六年 etc.